

高校生の進路成熟に関する縦断的研究

愛知教育大学 職業指導教室 坂柳恒夫

A Longitudinal Study of Career Maturity in Senior High School Students.

Tsuneo SAKAYANAGI

Department of Career Guidance

問題と目的

わが国の学校教育において「進路指導」が公式用語として登場したのは、昭和33年(1958)年の中学校学習指導要領の改訂(昭和36年度より実施)からである。学校における職業指導と進路指導は本来同義語であるが、従前使用されていた「職業指導」という用語は就職希望者を対象とした指導・援助と限定的に受け取られる傾向もあって、その本質や意味内容が十分に理解されなかった。そのため、学校における職業指導の性格を一層適切に表現する必要性から「進路指導」という用語が採用された(文部省、1985)。

一方、わが国の進路指導(職業指導)に大きな影響を与えてきたアメリカでは、1970年代に入ってから、キャリア教育(Career Education)の提唱・普及とも関連して、従前の“Vocational Guidance”に代わって、“Career Guidance”という用語が一般化するようになった。Herr & Cramer(1988)によれば、“Career Guidance”の理論と実践は、新たなキャリア・モデル(career model)に依拠して展開されているといわれている。従来のキャリア・モデルでは、主として、過去・現在・未来を所有する個人をダイナミックな視点からアプローチする必要性が強調さ

れていた。しかし最近の展開の中で指摘されているのは、個人の時間的経過や動態的プロセスの強調だけでなく、視野の範囲においても、「教育的・職業的キャリア」の視点から「人生(生涯)・生き方」という視点にまで拡大され、より包括的になってきていることである(Gysbers & Moore, 1975; Super, 1980, 1984, 1986; Herr & Cramer, 1988)。こうしたアメリカの“Career Guidance”の状況やキャリア概念の進化などを反映して、最近のわが国の進路指導においても、「生き方」・「人生設計」の指導・援助といったことが重視され、強調されている。そして、進路指導とは、個々の生徒の進路の発達・成熟(career development/maturity)の促進を目指した教育活動であり、将来の人生設計の指導、生き方の援助であるといわれている。

ところで、わが国の中学校・高等学校における進路指導の現状や生徒の実態などを考慮すると、坂柳(1990, 1991)が指摘しているように、グローバルな単一の進路概念の場合には、その効用と同時に、意味内容が多義的であり、曖昧であるといった問題点がみられる。すなわち、わが国の進路指導における「進路」という概念は、対象によって、想起されるイメージが異なることである。例えば、「進路」という言葉は一般的にみると、中学生の

場合には、「進学（教育進路）や高校受験」を連想させ、大学生の場合には「就職や職業」を連想させることが多い。また、中学校における進路指導といった場合にも、「職業」に絡むイメージが希薄化しており、「進学」への指導を想起させることが多いといえる。このような進路概念の多義性・曖昧性に着目するならば、進路の内容を具体的に明示しておくことが要請される。とりわけ、中学生・高校生の進路発達ないし進路成熟の促進を目指す進路指導においては、主要な進路内容として、①人生進路、②職業進路、③教育進路、の3つの進路系列を視野に入れ、明確化しておくことが必要であると考えられる（坂柳；1988,1990,1991）。先に報告した「中学生の進路成熟に関する縦断的研究」（坂柳、1992）では、進路成熟の様相をこのような3つの進路系列（教育・職業・人生）に区分し、それぞれの進路成熟の縦断的な推移を分析した。その結果、一般的特徴として、男女ともに、進学へのレディネスを中心とする教育進路成熟の進行状況（進歩的变化）と比べると、人生・職業の両側面における進路成熟の進行状況は2年生以降から遅滞する傾向が見だされた。

そこで本研究では、青年期における進路成熟の様相や特徴をさらに探求するために、高校生段階（青年中期）の進路成熟の発達の变化について分析することにする。進路成熟の発達の变化や形成過程を明らかにするためには、縦断的研究方法を導入していくことの必要性が指摘されている（例えば、Vondracek et al.1986）。本研究では、高校生の進路成熟の諸相を「教育」・「職業」・「人生」の3つの側面に区分し、縦断的データをもとに、その一般的特徴や構造的変化などについて検討していくことにしたい。

研究の方法

1. 調査の対象・時期

本研究において使用したデータは、愛知県内の公立高校普通科で、全校生徒を対象にして各クラス単位で、1989年12月、1990年12月、1991年12月の3年間に渡って、実施された「高校生の進路発達に関する縦断的追跡調査」の一部である。本研

究では、3学年間における進路成熟の縦断的推移を検討するために、1989年の第1回調査で1年生であった生徒を分析の対象とした。具体的には、3年間に渡って調査対象として確定できた、男子生徒97名、女子生徒85名について分析を行う。

2. 進路成熟の測定尺度

進路成熟の測定では、①教育進路成熟（主に、進学先の選択・決定への取り組み姿勢）、②職業進路成熟（主に、職業選択への取り組み姿勢）、③人生進路成熟（主に、人生や生き方への取り組み姿勢）の3系列の進路成熟度が測定できる「進路成熟態度尺度」（坂柳、1992）を使用した。

進路成熟を測定する尺度項目は、〈表1〉に示されているように、それぞれ合計15項目で構成されている。これらの尺度は、各項目とも「5：あてはまる」、「4：ややあてはまる」、「3：どちらともいえない」、「2：ややあてはまらない」、「1：あてはまらない」という5段階評定を用い、5点から1点までの得点が与えられ、各側面の進路成熟（下位尺度）の合計得点が算出されるようになっている。従って、各下位尺度の得点範囲は、15～75点に分布し、中間点は45点となっている。この得点が高いほど、当該側面の進路成熟度が高いことを意味している。

3. 分析方法

はじめに、高校生の進路成熟の縦断的推移（発達の变化）の様相をみるために、3つの調査時点ごとに、進路成熟（3つの下位尺度）の合計得点とその標準偏差を求めた。同時に、進路成熟態度尺度の信頼性（内的整合性）について分析を行った。また、3系列の進路成熟について、繰り返しのある場合の平均得点に差があるかどうかを検討するために、繰り返し測定での分散分析と個別のt検定を行った。

次は、3つの調査時点における進路成熟の構造的な変化をみるために、進路成熟の下位尺度間のPearsonの相関係数を算出した。そして、高校生の進路成熟の因子構造をみるために、その相関行列をもとに、因子分析（Varimax法、Promax法による回転）を行った。

<表1> 進路成熟の測定尺度(項目)

教育進路成熟 (Educational Career Maturity : ECM)

1. 進学のための勉強は、自分から進んでしている。
 2. どんな種類の学校や学科があるのか、気にしている。
 3. 将来どんな学校に進学するのか、見通しを立てている。
 4. 志望校に進学するための計画をたてて、準備をしている。
 5. 志望校の校風や特徴などは、自分で調べている。
 6. どんな上級学校を選ぶかを、自分で考えている。
 7. 進学や進学先のことについて考えている。
 8. 進学の目標を立てて、それに向かって努力している。
 9. 進学のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。
 10. 進学先は、自分の意思で決めている。
 11. 何のために進学するのかを考えている。
 12. 志望校に進学するための道筋が、わかっている。
 13. 進学先について、いろいろと比較し検討している。
 14. 進学先は、自分で責任をもって決めている。
 15. 自分を生かせる上級学校について、調べている。
-

職業進路成熟 (Occupational Career Maturity : OCM)

1. 将来の職業の準備は、自分から進んでしている。
 2. どんな種類の職業や産業があるのか、気にしている。
 3. 将来どんな職業につくのか、見通しを立てている。
 4. 将来、職業につくための計画を立て、準備している。
 5. 職業の内容や就職方法などは、自分で調べている。
 6. どんな職業を選ぶかを、自分で考えている。
 7. 将来の職業や就職先のことについて考えている。
 8. 職業につくための目標を立て、それに向かって努力している。
 9. 職業を選ぶことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。
 10. 将来の職業については、自分の意思で決めている。
 11. 何のために就職するのかを考えている。
 12. 希望する職業につくための道筋が、わかっている。
 13. 将来の職業や就職先について、いろいろと比較し検討している。
 14. 将来の職業や就職先は、自分で責任をもって決めている。
 15. 自分を生かせる職業について、調べている。
-

人生進路成熟 (Life Career Maturity : LCM)

1. これからの人生を豊かにするために努力している。
 2. これからの人生のことを考えて、自分なりの人生設計を立てている。
 3. これからの人生のことについて考えている。
 4. これからの人生では、自分の意思と責任で生き方を決めていきたい。
 5. いろいろな生き方を比べたりして、自分の生き方を探している。
 6. どんな人生や生き方があるのか、関心がある。
 7. これからの自分の人生は、自分の力で切り開いていく。
 8. これからの人生について自分なりの目標を持っている。
 9. 人生の意味について考えている。
 10. 自分で責任をもってこれからの人生を送っていく。
 11. これからの人生について、見通しを立てている。
 12. どんな生き方をしたらよいのか、自分で考えている。
 13. 人生のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。
 14. これからの人生での出来事を自分なりに予想できる。
 15. 自分にふさわしい生き方を、いろいろと考えている。
-

結 果

1. 進路成熟態度尺度の内的整合性

最初に、構成された進路成熟態度尺度の内的整合性（等質性）を、調査時期（学年）ごとに検討する。〈表2〉は、進路成熟の下位尺度の内的整合性の指標として、Cronbachの α 係数を示したものである。

〈表2〉 進路成熟下位尺度の α 係数

		高1時点 (1989年)	高2時点 (1990年)	高3時点 (1991年)
男	教育進路成熟尺度	.887	.853	.877
	職業進路成熟尺度	.871	.843	.877
	人生進路成熟尺度	.910	.868	.909
女	教育進路成熟尺度	.875	.895	.900
	職業進路成熟尺度	.915	.906	.909
	人生進路成熟尺度	.909	.931	.953

これをみると、進路成熟の下位尺度の α 係数は、男子では.843～.909、女子では.875～.953、となっており、満足のできる水準にある。また、各尺度得点と尺度に含まれる項目との相関も高く、そして項目間相関においても、全体的には正の有意に高い相関係数が得られた。

以上の結果から、進路成熟を測定する3つの下位尺度は、内的整合性の点で一貫した内容を備えており、中学生対象の結果（坂柳、1992）と同様に、信頼性の高い尺度であるといえる。

〈表3〉 3学年間の進路成熟の平均得点・標準偏差

	高1時点 平均(SD)	高2時点 平均(SD)	高3時点 平均(SD)
男 子			
教育進路成熟	41.56(9.58) <<<	46.31(8.94) <<<	53.03(10.02) <<<
職業進路成熟	40.46(8.93) <<<	43.96(8.18) <<<	47.81(10.09) <<<
人生進路成熟	44.45(9.71) <<<	48.25(8.48) <<	51.38(10.77) <<
女 子			
教育進路成熟	41.96(9.67) <<<	47.00(9.64) <<<	54.07(10.37) <<<
職業進路成熟	41.15(9.92) <<<	44.38(9.60) <<<	50.60(10.06) <<<
人生進路成熟	45.26(9.14) ns	46.25(10.41) <<	51.44(11.84) <<

(注) <<<……P<.001, <<……P<.01, <……P<.05, ns……有意差なし

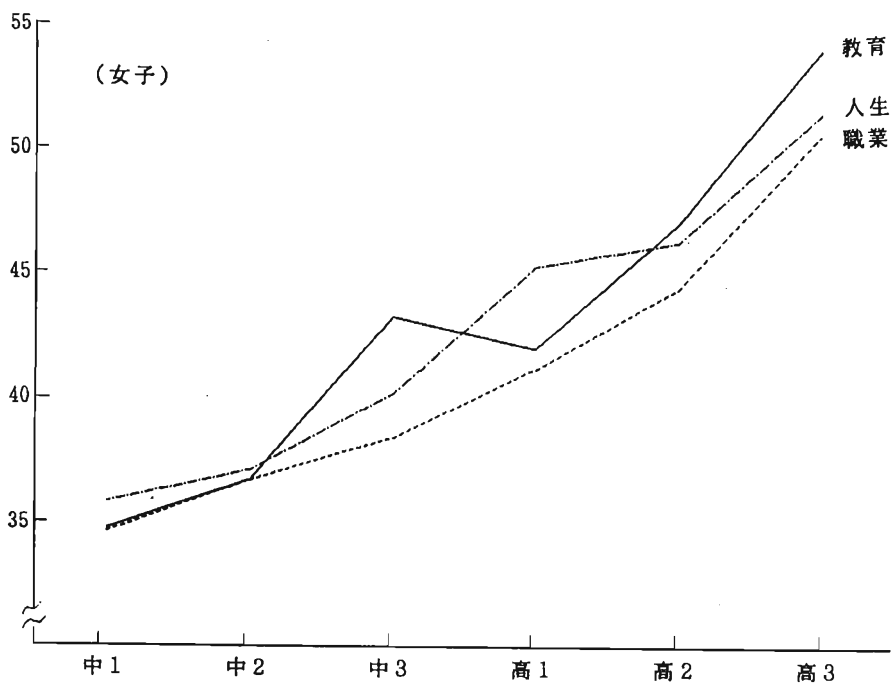
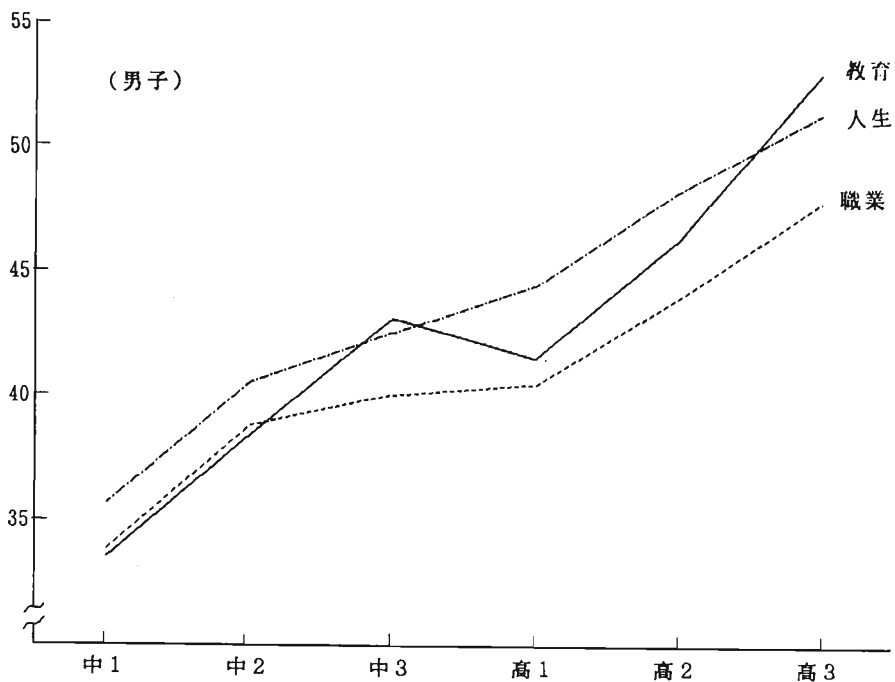
2. 進路成熟の縦断的推移

高校生の進路成熟における発達の変化の様相を、教育・職業・人生の3系列（側面）に区分し、各平均得点の縦断的推移を中心にみていくことにする。各調査時期（学年）ごとの3系列の進路成熟の平均得点・標準偏差は、〈表3〉に示したとおりである。また、〈図1〉は、同表を視覚化したものである。なお、この図には、中学生と高校生との比較参照のため、中学生の進路成熟の縦断的推移の結果（坂柳、1992）も掲載してあるが、中学3年から高校1年までの推移については、横断データによるものである。

(1)教育進路成熟の推移

まず、教育進路成熟を従属変数として、性別・学年（調査時期）の2要因による繰り返し測定での分散分析を行った。その結果、学年（調査時期）の主効果（ $F=129.16, P<.001$ ）は有意であったが、性別および性・学年の交互作用は有意でなかった。さらに、個別にt検定（相関する2つの平均の差の検定）をしたところ、いずれの学年の間にも、0.1%の水準で統計的な有意差がみられた。

以上の結果から、進学へのレディネス（心の準備状態）を中心とした教育進路成熟については、高校生の男女いずれも、学年の進行とともに得点がほぼ直線的に上昇しており、教育面における進路成熟の顕著な進歩的変化が認められる。なお、横断データであるが、男女とも、中学3年と高校1年との間には有意差が認められなかった。



〈図1〉 進路成熟の発達的变化

(2)職業進路成熟の推移

次に職業の選択や就職など職業面における進路への関心や自律的・計画的な取り組み態度（心の準備状態）を測定内容としている、職業的な進路成熟の発達の変化について分析していくことにする。

職業進路成熟では、繰り返し測定での分散分析の結果、教育進路成熟と同様に、学年（調査時期）の主効果（ $F=64.36, P<.001$ ）のみ有意差がみられた。また、個別のt検定の結果、いずれの学年の間にも、0.1%の水準で統計的有意差がみられた。

この結果から、高校生の発達過程においては、男女いずれにあって、将来の職業選択や就職の問題にも関心を持ち、自律的・計画的に取り組んでいこうとする姿勢が、学年進行とともに高まっているといえる。なお、横断データの比較になるが、高1女子は、中3女子よりも、職業的な成熟度が高くなっている（ $t=2.69, P<.01$ ）。

(3)人生進路成熟の推移

高校生は、これからの人生や生き方について、どの程度関心を持ち、自律的・計画的に考えているのか、すなわち、人生面での進路成熟の発達的变化について、分析していくことにする。

人生進路成熟度を従属変数として、性・学年の2要因による繰り返し測定での分散分析を行ったところ、学年の主効果（ $F=33.53, P<.001$ ）のみ有意差がみられ、性差や交互作用はみられなかった。さらに個別のt検定の結果、女子の高1と高2との間のみ有意差がみられなかったが、その他はいずれの学年間にも有意差がみられた。

以上の結果を整理すると、男子では、学年の進行とともに、人生や生き方に関する進路成熟度が顕著に高くなってきているといえる。一方、女子の場合には、1年から2年にかけては横ばい傾向であるが、2年以降から人生・生き方での進路成熟に深まりが認められる。なお、横断データの比較になるが、中学3年と高校1年との間で、成熟得点に有意差が認められた（男子 $t=1.97, P<.05$; 女子 $t=3.41, P<.001$ ）。男女ともに、中学3年と比べると、高校1年の方が人生面の成熟度が高くなっている。

3. 進路成熟の側面間相関

同一の調査対象者について、3回の調査を実施したので、進路成熟の下位尺度における時点間相関と、各調査時点（学年）における進路成熟の下位尺度間の相関が得られた。従って、進路成熟の構造的な変化について、この2つの視点からみていくことにする。

(1)進路成熟の時点間相関

進路成熟の諸側面について、3年間の時点間相関係数を、〈表4〉に示した。

〈表4〉 進路成熟(下位尺度)の時点間相関

		1-2年	2-3年	1-3年
男	教育進路成熟	.590	.396	.314
	職業進路成熟	.487	.475	.266
子	人生進路成熟	.451	.453	.268
	教育進路成熟	.704	.531	.327
女	職業進路成熟	.647	.407	.383
	人生進路成熟	.557	.449	.393

教育進路成熟についてみると、男女共通して、1-2年間の時点間よりも、2-3年の時点間の相関係数の方が、低くなっている。この結果は、教育進路成熟の進行状況が、比較的安定した状態から、次第に揺れ動きの大きい状態へと移行していることを示唆しているといえる。動揺化の程度は、女子よりも男子の方が高いといえる。

職業・人生面の進路成熟については、男子の場合には、1-2年、2-3年、の両時点間がほぼ同一水準の相関を示している。これに対して、女子の場合には、1-2年の時点間と比べると、2-3年の時点間の相関の方が低くなっている。女子では、学年の進行につれて、職業・人生の両面の進路成熟が動揺化していることを示している。

(2)進路成熟の側面間相関

各学年（調査時期）における進路成熟の下位尺度間の相関係数は、〈表5〉に示したとおりである。

いずれの調査時期（学年）においても、全般的にみると、進路成熟の下位尺度間には、男女とも有意な高い相関が認められる。着目されることは、男女いずれも、学年が進むにつれて、教育と職業

〈表5〉 各時点での進路成熟の側面間相関

		1年	2年	3年
男	教育－職業	.714	.630	.537
	職業－人生	.759	.620	.761
子	人生－教育	.657	.518	.516
	教育－職業	.685	.626	.520
女	職業－人生	.638	.658	.584
	人生－教育	.573	.528	.580

との相関係数が次第に低下していることである。この結果は、学年が進むのにつれて、進学レディネスを中心とした教育進路成熟が次第に独立・分化していくことをうかがわせるものであると推察される。

4. 進路成熟の因子構造

高校生の進路成熟がどのような因子構造をもっているかを調べるために、各調査時期（学年）における3つの下位尺度、総計9尺度について、男女別に因子分析を行った。その方法として、下位尺度のPearson 相関係数をもとに、Scree Testによって因子数を決定し、主因子法の繰り返し法で共通性を推定し、2因子の主因子解を求めた。そして、より単純構造を得るために、Varimax 回転を行い、さらにPromax回転を行った。〈表6〉は男子の準拠構造値と因子間相関を示したものである。また、〈表7〉は、女子のそれを示したものである。

〈表6〉進路成熟のPromax回転後の準拠構造及び因子間相関(男子)

		I	II
高1	教育進路成熟	.761	-.020
	職業進路成熟	.803	-.068
	人生進路成熟	.747	-.110
高2	教育進路成熟	.505	.213
	職業進路成熟	.447	.353
	人生進路成熟	.490	.202
高3	教育進路成熟	.006	.560
	職業進路成熟	-.033	.797
	人生進路成熟	.009	.758
因子間相関 I		1.000	
II		.405	1.000

〈表7〉進路成熟のPromax回転後の準拠構造及び因子間相関(女子)

		I	II
高1	教育進路成熟	.727	-.103
	職業進路成熟	.714	-.023
	人生進路成熟	.588	.031
高2	教育進路成熟	.607	.137
	職業進路成熟	.562	.135
	人生進路成熟	.380	.274
高3	教育進路成熟	.052	.604
	職業進路成熟	.070	.530
	人生進路成熟	-.058	.722
因子間相関 I		1.000	
II		.532	1.000

結果をみると、男女とも共通して、第I因子では、高校1年と高校2年の両学年で、教育・職業・人生の各進路成熟の側面が融合化した、総合的な進路成熟因子が示されている。しかし、総じて高校1年生の因子負荷が高くなっており、高校1年を中心とした総合的な進路成熟に、高校2年の総合的な進路成熟が附着している状態にあるといえる。また、第II因子では、高校3年の内部で、教育・職業・人生の各進路成熟の側面が融合化した、卒業学年特有の総合的な進路成熟因子が示されている。従って、以上の結果より、男女ともに、第I因子は「低学年の総合的な進路成熟因子」、第II因子は「卒業学年の総合的な進路成熟因子」と命名した。この2つの因子間の相関をみると、男子で.405、女子で.532となっており、ほぼ中程度の相関が認められる。

全体の考察とまとめ

1. 高校生の進路成熟の縦断的推移について

本研究では、普通科の高校生を対象にして、進路成熟の発達的变化を、教育、職業、人生、の3つに区分し縦断的に分析した。まず、高校生の進路成熟の一般的特徴について考察する。発達的にみると、女子の人生進路成熟度では、1年から2年にかけての横ばい（停滞）傾向がみられ、2年以降から成熟度が高まっている。しかし、これを除けば、男女とも、教育・職業・人生いずれの進路成熟においても、学年進行に応じての進歩的な変化が十分認められる。

次に、進路成熟の速度という観点からとらえてみると、高1から高3までの成熟度の上昇ポイント（高3と高1との平均得点の差）は、男女ともに、1位が「教育」（男子11.5、女子12.11）で次いで「職業」（男子7.35、女子9.45）、「人生」（男子6.93、女子6.13）の順となっている。すなわち、進学へのレディネスを中核とする教育的な進路成熟は、進歩的変化のスピードが、他の系列の進路成熟よりも、速くなっていることが理解できる。

先に報告した中学生の進路成熟の縦断的分析においては、教育的な進路成熟の進行状況に比較すると、職業・人生の両面における進路成熟には、中学2年以降から遅滞の傾向がみられた。特に、中学3年という卒業学年の段階では、「将来の職業」や「人生・生き方」を積極的に自分に問いかける以前に、目の前にある卒業時の「進学問題」の方が大きな関心事になっている状況がうかがわれた。しかし、今回の普通科高校生を対象とした縦断分析では、職業や人生といった進路問題に対しても関心が高まり、自律的・計画的に取り組む態度がうかがわれる。そして、一般的な傾向としても、中学生の進路成熟水準と比べると、高校生のそれは高い水準から上昇的に推移しているといえる。

普通科高校に入学した生徒の多くが、大学等の上級学校に進学を希望している。従って、ややもすると、普通科高校では、進学に焦点をおいた指導が進路指導であると考えている場合も多いと推察される（文部省，1985）。進路指導の本質は、一人ひとりの生徒が高校卒業時の進路をどう選択するかを含めて、将来職業人としてどう成長し、どのように生きていくことが望ましいかなどといった長期的展望にたつての人間形成を目指したものである。このことから、普通科高校の進路指導においても、単に学業成績や学力偏差値による「合格の可能性」だけでなく、生徒の個性、職業希望や人生設計に応じた指導に努めることが必要であるといえる。

2. 進路成熟の各側面の相関関係について

次に、高校生の進路成熟の各側面の相関関係を

考察する。まず、各下位尺度の時点間相関をみると、「高1と高2」の相関（男子.451～.590、女子.557～.704）は、「高2－高3」の相関（男子.396～.475、女子.407～.531）と比較して、総じて数値が高くなっている。この結果は、学年の進行につれて、進路成熟が徐々に揺れ動きの大きい状態へと移行していることを示唆している。

各時点（学年）における進路成熟間の相関は、全体的にみると、高いものであった。しかし、教育と職業との相関については、学年が進むにつれて徐々に数値が低下しており、分化していく傾向もみられた。この結果は、生徒が考えている進学の問題が職業と関係づけられることが低下していることを示していると推察される。

3. 進路成熟の因子構造について

因子分析の結果では、男女とも、Scree Testの結果や固有値の減少推移から、2因子が最適と判断された。男女ともに、第I因子は「高校低学年の総合的進路成熟因子」、第II因子は「高校卒業学年の総合的進路成熟因子」と解釈・命名された。結論からいえば、高校3年間において機能している進路成熟の内容は、質的に同じものとはいえないことである。すなわち、高校1年の時点での進路へのレディネスと、卒業学年（高校3年時点）になってからの進路へのレディネスとでは、確かに中程度の関連はみられるけれども、独立した因子として抽出されたように、質的には異なるものである。この結果は、調査対象が普通科の進学校の生徒であったことも起因していると考えられる。すなわち、卒業学年においては、生徒のかなりの部分が大学入試などの直前に迫ってきた進路問題に対して現実的な準備を行っていることは、十分予想されることである。従って、高校低学年での進路レディネスとは、質的に異なる内容として具現化されたものと考察される。

また、高校2年時点の位置づけであるが、高校低学年の因子として、2年の尺度群が布置していることから、進路成熟の内容は1年に近似したものであるといえる。ただし、部分的には、高校3年の様相も示しはじめていることも看過できない。

4. まとめと今後の検討課題について

本研究では、普通科の高校生（男子97名、女子85名）を対象にして、教育・職業・人生の3系列における進路成熟の発達的变化を縦断データをもとに分析した。その結果、一般的特徴として、教育・人生・職業の各進路成熟は、学年が進むにつれて、上昇的に変化しており、進路成熟の高まりがみられることなどを明らかにできた。しかし、職業科に所属する高校生の進路成熟の発達的变化については、ここで得られた結果が妥当するかどうか確認されていない。従って、残された課題の1つとしては、職業科高校生を対象とした進路成熟の発達的变化の分析および学科別の比較分析も必要である。

さらに、今後の課題として、高校生の進路成熟の形成過程に対して、どのような要因が、どのような形で影響を及ぼしているのか、すなわち、進路成熟の影響要因の分析を進めていくことが必要である（King,1989;坂柳, 1991）。この要因には、さまざまなものが考えられる。特に、親、教師、友人など、具体的な身近な人間とのかかわりにおいて、彼らの進路成熟も規定されていると予想されるので、重要な他者との相互作用が彼らの進路成熟形成に及ぼす影響について検討することも必要である（清水・坂柳, 1988）。

謝 辞

本研究で使用したデータは、関西大学教授清水和秋氏との共同研究の一部である。このようにその一部を単独で発表することに快諾し、ご協力とご助言をいただきました同氏に深く感謝致します。また、データ収集に多大なご協力をいただきました高等学校の諸先生方、生徒の皆さんに厚くお礼申し上げます。

(1992年12月21日受理)

引用・参考文献

- Gysbers, N. C. & Moore, E. J. 1975 Beyond Career Development. *Personel and Guidance J.* 53, 647-652
- Herr, E. L. & Cramer, S. H. 1988 Career guidance and counseling through the life span: Systematic approaches. (3rd ed.) Boston: Scott, Foresman.
- King, S. 1989 Sex Differences in a Causal Model of Career Maturity. *J. of Counseling & Development*, 68, 208-215.
- 文部省 1985 中学校・高等学校進路指導の手引—進学指導編 日本進路指導協会
- 坂柳恒夫 1988 揺れ動く進路—進路観の発達 教育相談研究, 51, 22-25.
- 坂柳恒夫 1990 進路指導におけるキャリア発達の理論 愛知教育大学研究報告第39輯, 141-155.
- 坂柳恒夫 1991 進路成熟の測定と研究課題 愛知教育大学教科教育センター研究報告第15号, 269-280.
- 坂柳恒夫 1992 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告第16号, 299-308.
- 清水和秋・坂柳恒夫 1988 進路不決断と進路成熟—父親、母親、友人、教師の影響に関する高校生の横断的な研究 進路指導研究, 9, 28-36.
- Super, D. E. 1980 A life-span, life-space, approach to career development. *J. of Vocational Behavior*, 13, 182-198.
- Super, D. E. 1984 Career & life development. in Brown, D. & Brooks, L. (eds.) *Career Choice & Development*. Jossey-Bass.
- Super, D. E. 1986 Life-career roles: self-realization in work and leisure. in Hall, D. T. (ed.) *Career development in organizations*. Jossey-Bass.
- Vondracek, F. W., Lerner, R. M. & Schulenberg, J. E. 1986 Career Development: a life-span developmental approach. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.